

# 高知県が設立した公立大学法人の利益処分について（案）

## I 制度について

### 1 概要

- (1) 公立大学法人は、毎事業年度、損益計算において利益を生じたときは、前事業年度から繰り越した損失をうめ、なお残余があるときは、その残余の額は、積立金として整理しなければならない（地方独立行政法人法（以下「法」という）第40条第1項）。  
ただし、設立団体の長（知事）の承認を受けた場合は、その残余の額の全部又は一部を翌事業年度に繰り越すことができる（同条第3項）。
- (2) 公立大学法人は、中期目標期間の最後の事業年度終了後に、上記積立金があるときは、その額のうち知事の承認を受けた金額を、次の中期目標の期間における業務の財源に充てることができる（同条第4項）
- (3) 知事は、当該承認をしようとするときは、あらかじめ、地方独立行政法人評価委員会の意見を聴かなければならない（同条第5項）。

## II 公立大学法人に係る年度繰越承認の取扱い

### (1) 繰越承認基準について

繰越承認の基準を定めるにあたっては、次の事項を踏まえるものとする。

- ① 「地方独立行政法人会計基準及び地方独立法人会計基準注解」（総務省告示）（以下「会計基準」という。）に基づくものであること。
- ② 法人の経営努力を促す仕組みであること。
- ③ 運営費交付金が公的資金であることを踏まえ、わかりやすく透明な仕組みであること。

### (2) 承認の対象となる利益

知事の承認を受けようとする額については、法第40条第3項に基づき、次のいずれの要件にも合致する場合に承認するものとする。

- ① 当該事業年度における経営努力により生じたもの
- ② 法第26条第2項第6号に基づき、中期計画に定めた剰余金の使途に充てようとするもの  
なお、会計基準第72に記載されている経営努力認定の対象は以下のとおり。
- ① 運営費交付金及び国又は地方公共団体からの補助金等に基づく収益以外の収益（以下「自己収入」という。）から生じた利益
- ② 中期計画（年度計画）の記載内容に照らして、法人が本来行うべき業務を効率的に行った結果、費用の減少により発生した利益
- ③ その他、法人において経営努力によることを立証したもの

### (3) 経営努力認定の考え方

- ①利益処分の承認は、法人に経営努力のインセンティブを与えるための仕組みであることから、経営努力の認定基準は、経営改善や増収など法人の経営努力を促すものでなければならない。公立大学法人である以上、経営努力の認定は厳格に行う必要があるが、一方で、基準が厳格すぎると、過度の業務効率化を課すことにもなり、大学の教育研究活動に影響が及ぶおそれがある。
- ②上記①を勘案して、利益処分の承認にあたっては、評価委員会が経営努力によるものであることを確認することとする。

なお、利益処分の承認に際しては、その前提として、法人が全体として業務を予定どおり実施している必要があり、この点については、国立大学法人並びに多くの先行法人と同様に、客観的な指標である学生収容定員の充足率により確認するとともに、評価委員会の年度評価を受けて判断することとする。

### (4) 経営努力の認定と剰余金の取扱いについて

経営努力の認定は、以下により行う。

#### ①中期計画・年度計画との関係

##### ア 学生収容定員の充足

学生収容定員（学部及び大学院の合計）の充足率が90%（平成23年度までは85%）を下回った場合は、本来行うべき業務が行われなかったものとみなし、**未充足学生の教育経費相当額**（基準となる充足率を下回る分の学生数にかかる教育経費）を積立金として翌事業年度に繰り越し、原則として中期目標期間終了時に県に返還する。

##### イ 経費の抑制により生じた利益

経費の抑制により生じた利益について、経営努力認定を行うものは、中期計画・年度計画の記載内容、関係資料及び法人の説明に照らして、評価委員会が確認する。

評価委員会が経営努力によることを確認できなかった利益については、積立金として整理し、原則として中期目標期間終了時に県に返還する。

##### ウ その他

評価委員会の年度評価において、全体として行うべき業務を行っていないと評価される場合は、**剰余金の全額**を積立金として翌事業年度に繰り越し、原則として中期目標期間終了時に県に返還する。

② 自己収入の増加により生じた利益の取扱い

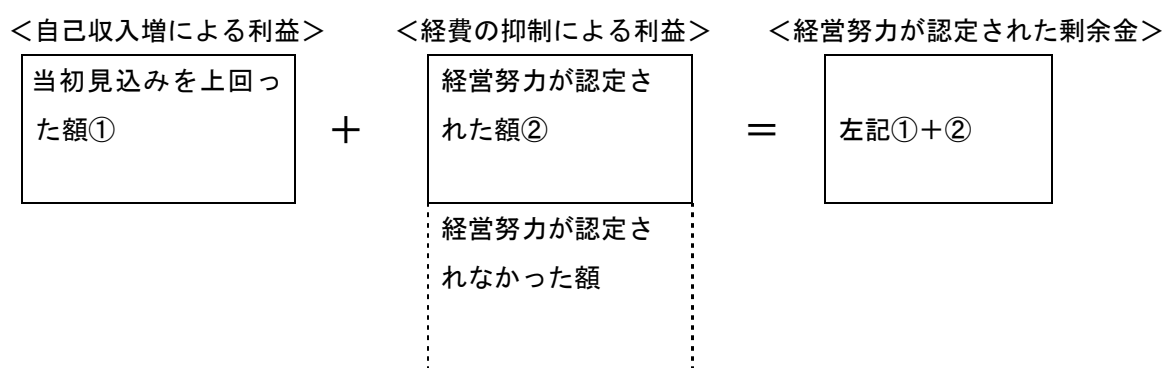
自己収入（※）の増加により生じた利益は、経営努力によるものとして認定する。

※自己収入の内訳

- ・ 授業料
- ・ 入学検定料
- ・ 入学料
- ・ 学生寮使用料
- ・ 教職員宿舎貸付料
- ・ 財産使用料、賃貸料、敷金・保証金回収額  
※以上、減免制度がある場合は、減免額と相殺
- ・ 大学入試センター試験実施経費・委員協力経費
- ・ 補助金間接経費及び事務費振替分
- ・ 受託研究、受託事業の間接経費及び事務費振替分
- ・ 寄附金収入（受け入れにより、追加経費が発生する場合は、追加経費相当額を除いた部分）
- ・ 文献複写代、コピー機利用料、各種手数料
- ・ 財産売却収入
- ・ 特許収入
- ・ その他、その収入の大部分が法人の利益となるもの

(5) 剰余金の算定イメージ

剰余金のうち、以下の①及び②が、経営努力が認定されたものとして翌年度へ繰り越される。



(注) 1：上記①及び②がマイナスの場合も、①と②の合計が剰余金として繰越される。

2：学生収容定員が充足しなかった場合や、評価委員会の年度評価において、全体として行うべき業務を行っていないと評価される場合は、上記(4)①に沿って、それぞれ剰余金の一部若しくは全額を減額する。

### Ⅲ 公立大学法人に係る中期繰越承認の取扱い

#### (1) 基本的な考え

各事業年度において、経営努力による目的積立金等の認定は行っているため、中期目標最終事業年度においても、各年度の剰余金の認定基準を準用する。

#### (2) 積立金の翌中期目標期間への繰越認定については、以下により行う。

##### ① 学生収容定員の充足

中期目標期間における学生収容定員（学部及び大学院の合計）の充足率が90%を下回った場合は、本来行うべき業務が行われなかったものとみなし、未充足学生の教育経費相当額（基準となる充足率を下回る分の学生数にかかる教育経費）を県に返還する。

##### ② 経費の抑制により生じた利益

経費の抑制により生じた利益について、経営努力認定を行うものは、中期計画・年度計画の記載内容、関係資料及び法人の説明に照らして、評価委員会が確認する。  
評価委員会が経営努力によることを確認できなかった利益については、県に返還する。

##### ③ その他

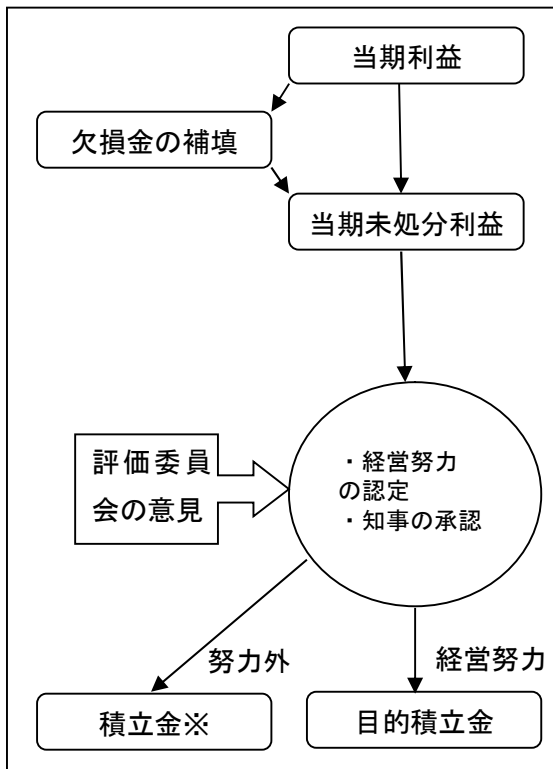
評価委員会の中期目標期間評価において、全体として行うべき業務を行っていないと評価される場合は、積立金の全額を県に返還する。

##### ④ 自己収入の増加により生じた利益の取扱い

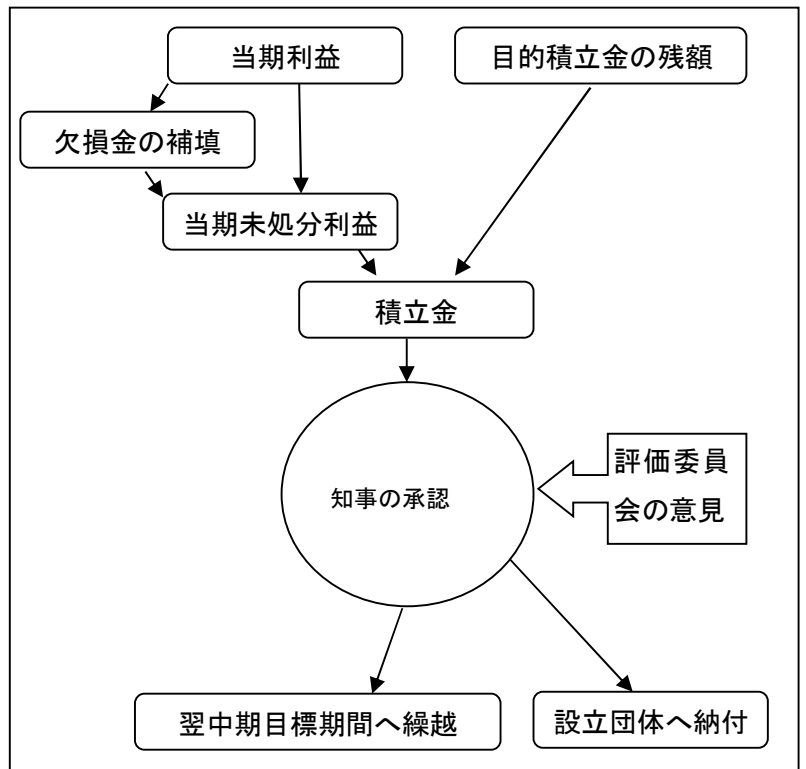
自己収入の増加により生じた利益は、経営努力によるものとして認定する。

(参考) 繰越しの流れ (フロー図)

各事業年度



中期目標期間最後の事業年度



※各事業年度において、積立金が発生した場合は、中期目標期間終了後に設立団体に納付することが当評価委員会において決められている。

## 地方独立行政法人法

(利益及び損失の処理等)

- 第四十条 地方独立行政法人は、毎事業年度、損益計算において利益を生じたときは、前事業年度から繰り越した損失をうめ、なお残余があるときは、その残余の額は、積立金として整理しなければならない。ただし、第三項の規定により同項の用途に充てる場合は、この限りでない。
- 2 地方独立行政法人は、毎事業年度、損益計算において損失を生じたときは、前項の規定による積立金を減額して整理し、なお不足があるときは、その不足額は、繰越欠損金として整理しなければならない。
  - 3 地方独立行政法人は、毎事業年度、第一項に規定する残余があるときは、設立団体の長の承認を受けて、その残余の額の全部又は一部を翌事業年度に係る認可中期計画の第二十六条第二項第六号の剰余金の用途に充てることができる。
  - 4 地方独立行政法人は、中期目標の期間の最後の事業年度に係る第一項又は第二項の規定による整理を行った後、第一項の規定による積立金があるときは、その額に相当する金額のうち設立団体の長の承認を受けた金額を、当該中期目標の期間の次の中期目標の期間に係る認可中期計画の定めるところにより、当該次の中期目標の期間における業務の財源に充てることができる。
  - 5 設立団体の長は、前二項の規定による承認をしようとするときは、あらかじめ、評価委員会の意見を聴かななければならない。
  - 6 地方独立行政法人は、第四項に規定する積立金の額に相当する金額から同項の規定による承認を受けた金額を控除してなお残余があるときは、その残余の額を設立団体に納付しなければならない。
  - 7 前三項に定めるもののほか、納付金の納付の手続その他積立金の処分に関し必要な事項は、設立団体の規則で定める。

## 地方独立行政法人会計基準及び地方独立行政法人会計基準注解

### 第 72 法第 40 条第 3 項による承認の額

利益の処分に関する書類において、目的積立金として整理しようとするときは、「地方独立行政法人法第 40 条第 3 項により設立団体の長の承認を受けた額」（承認前にあっては「地方独立行政法人法第 40 条第 3 項により設立団体の長の承認を受けようとする額」としてその総額を表示しなければならない。

＜参考＞経営努力認定の考え方について

- 1 利益の処分に関する書類における「法第 40 条第 3 項により設立団体の長の承認を受けた額」（承認前にあっては「法第 40 条第 3 項により設立団体の長の承認を受けようとする額」）は、地方独立行政法人の当該事業年度における経営努力により生じたとされる額である。
- 2 上記 1 の額の処分先としては、地方独立行政法人自体の動機付け確保の観点から、設立団体の長の承認を得て中期計画で定められることとなるが、地方独立行政法人の公共性等の性質により、その処分内容についてはいかなるものであっても認められるというものではなく、合理的な用途でなければならない。
- 3 「法第 40 条第 3 項により設立団体の長の承認を受けた額」が、地方独立行政法人の経営努力により生じたものであることについては、地方独立行政法人が自らその根拠を示すものとする。
- 4 具体的には、以下の考え方によるものとする。
  - (1) 運営費交付金及び国又は地方公共団体からの補助金等に基づく収益以外の収益（「第 24 行政サービス実施コスト」に定める、業務費用から控除すべき収入をいう。）から生じた利益であって、当該利益が当該地方独立行政法人の経営努力によるものであること
  - (2) 費用が減少したことによって生じた利益であって、当該利益が地方独立行政法人の経営努力によること（中期計画等の記載内容に照らして本来行うべき業務を行わなかったために費用が減少したことと認められる場合を除く。）
  - (3) その他地方独立行政法人において経営努力によることを立証した利益であること

### 第 91 中期目標の期間の最後の事業年度の利益処分

地方独立行政法人の中期目標の期間の最後の事業年度においては、当期末処分利益は、積立金として整理しなければならない。目的積立金及び前中期目標期間繰越積立金が残っている場合は、積立金に振り替えなければならない。

＜参考＞中期目標の期間の最後の事業年度の利益処分について

- 1 地方独立行政法人制度においては、中期目標による運営・評価のシステムが導入されており、運営費交付金のルール設定等財務関係においても一の中期目標及びそれに基づく中期計画の期間を一つの区切りとしているところである。そのような地方独立行政法人においては、運営費交付金等をこの中期目標の期間の終了時に精算するという考え方に立っていることから、最終年度に損益計算上の利益が生じた場合であっても法第 40 条第 3 項の処理は行わないほか、目的積立金や前中期目標期間繰越積立金が使用されずに残っていた場合は、中期目標の期間の最後の事業年度の利益処分時において、積立金に振り替えることを要するものである。
- 2 法第 40 条第 4 項に基づいて積立金を次の中期目標の期間に繰り越すこととされている地方独立行政法人においては、利益の処分又は損失の処理に関する書類のほか、設立団体納付金の計算書の作成を要する。当該計算書においては、中期目標の期間の最後の事業年度に係る利益処分を行った後の積立金の総額並びにその処分先である設立団体納付金の額及び前中期目標期間繰越積立金として次の中期目標の期間に繰り越される金額を記載するものとする。